

市場文化会館だより



いかがお過ごしですか

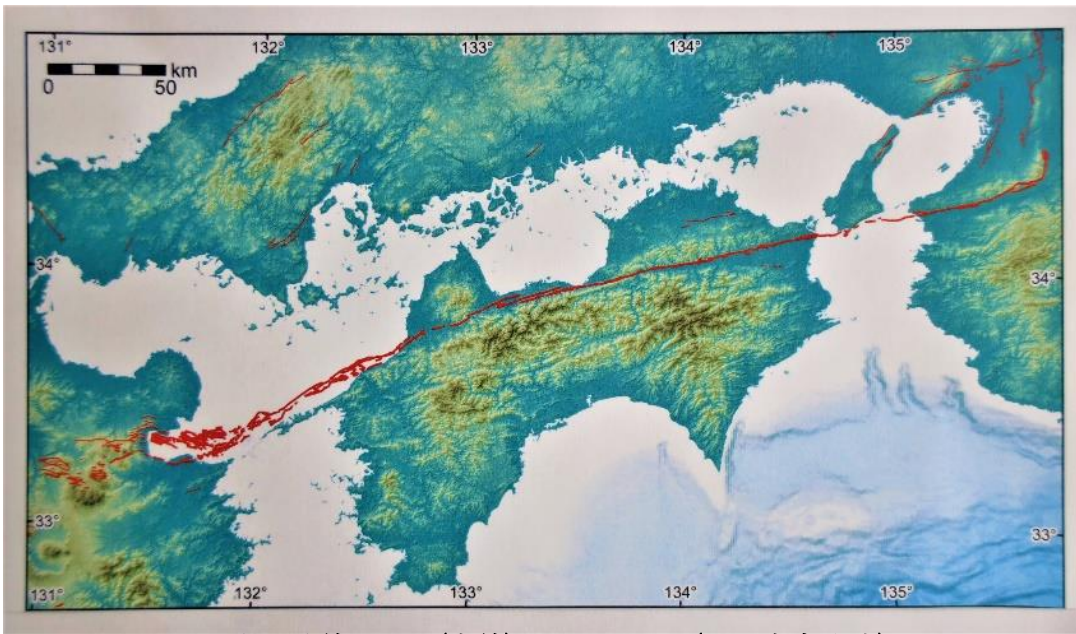


彼岸が過ぎ、ようやくしのぎやすくなってきました。新型コロナウイルスの感染状況も全国的に落ち着きを見せていますが、油断をせずに基本的な感染対策を引き続き徹底しなければなりません。また一回目の新型コロナウイルスワクチン接種後の感染についても気をつけなければなりません。

「中央構造線」について

今回は、ナウマン象の名前の由来となったドイツ人地質学者エドムント・ナウマンが発見した「中央構造線」を紹介します。「中央構造線」は、関東から九州に伸びる長大な断層です。ナウマンは、明治時代に日本の地質調査をしていて、西日本を縦断する大断層を発見し、この大断層を境に日本海側を内帯(ないたい)、太平洋側を外帯(がいたい)と呼んで区別しました。「断層」というのは、大地の中のズレ目をいいます。「構造線」は、「断層」のうち、たたくさんずれ動いた結果、両側に質の違う岩が並んだ、異なる地質の境界線になっている断層をいいます。

「中央構造線」は、日本がまだアジア大陸の一部だった頃(約一億年前)に誕生した長大な断層です。海溝と平行に関東から九州へ続き、西日本の地質構造を大きく二分しています。なお、中央構造線は、プレート境界ではありません。



中央構造線断層帯(赤線)の位置と地形(岡田真介作成)

四国地方の中央構造線は、鳴門市から徳島平野と阿讃山脈の境界線付近を走って三好市に達し、川之江から新居浜のすぐ南側を通り、砥部町から伊予市、佐田岬半島北側の沖合を通り豊予海峡に入っています。

四国における中央構造線の基本的な姿は三波川変成岩(いわゆる青石)と和泉層群(堆積岩)の右横ずれ境界断層です。県内では三波川変成岩は広く露出し、徳島の城山、川島の城山、岩津、美濃田、大歩危などでよく見られます。

阿讃山脈南縁東部では一六世紀以降の活動はなく、エネルギーが蓄積されていると考えられます。平均活動間隔は一〇〇〇年、右横ずれ量六mであると推定されています。この区間が活動した場合、M7を超える地震になると考えられます。

『長野県大鹿村中央構造線博物館HP』及び岡田篤正『中央構造線断層帯』より

神無月



天高く馬肥ゆる秋、晴れた日は、少しだけ夏の暑さが残っていますが、風が心地いいですね。

『神無月』は、十月の別名で、この月に日本中の八百万(やおよろず)の神様が、出雲の国(島根県)に集まり、いろいろなることを神議(かみはか)りするという言い伝えと、他の国には神様がなくなってしまうことから「神無月」と呼ばれてきました。神様の集まる出雲の国では「神在月(かみありづき)」と呼ばれています。

そこでは、人が計り知ることのできない「神事」が話し合われていて、来年の収穫や人の縁は神事なので、「どここの誰と誰を夫婦(めおと)にしよう」といった相談も行われるのだとか。どうやって決めているのか気になる場所ですね。

神様が一斉に集まるので、その他の地方は神様が留守になってしまうのでは?と思われるかもしれませんが、出雲に参集される神様は、山野や河川などに住む「国津神(くにつかみ)」といわれています。高天原(たかまがはら)から降臨した天津神(あまつかみ)は特に出掛けないとされています。また、恵比須(えびす)様や、金比羅(こんぴら)様、道祖神(どうそじん)、かまどの神様などもずっと留守番をしてくださると言われています。

神様が集まるといって「神在月」の島根県出雲の国に出掛けて、ご縁に思いをはせるのも良いですし、お近くの神社に参拝されるのもおすすめです。